

特許協力条約

発信人 日本国特許庁（国際予備審査機関）

出願人代理人 角田 嘉宏	様
あて名 〒650-0031 兵庫県神戸市中央区東町123番地の1 貿易ビル3階 有古特許事務所	



PCT見解書

(法第13条)
〔PCT規則66〕

発送日
(日.月.年) 05.7.2005

出願人又は代理人 の書類記号 03P456WO	応答期間 2005-9/5 日 上記発送日から 2 月以内
国際出願番号 PCT/JPO3/12754	国際出願日 (日.月.年) 06.10.03
優先日 (日.月.年) 13.06.03	
国際特許分類 (IPC) IntCl ⁷ F02C3/22, F01K23/10, F02C6/00, F02D29/06, F02M21/02, F23K5/00, F23N1/00	
出願人 (氏名又は名称) 川崎重工業株式会社	

1.	これは、この国際予備審査機関が作成した 1 回目の見解書である。
2.	この見解書は、次の内容を含む。 I <input checked="" type="checkbox"/> 見解の基礎 II <input type="checkbox"/> 優先権 III <input type="checkbox"/> 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解の不作成 IV <input type="checkbox"/> 発明の単一性の欠如 V <input checked="" type="checkbox"/> 法第13条 (PCT規則66.2(a)(ii)) に規定する新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解、それを裏付けるための文献及び説明 VI <input type="checkbox"/> ある種の引用文献 VII <input type="checkbox"/> 国際出願の不備 VIII <input type="checkbox"/> 国際出願に対する意見
3.	出願人は、この見解書に応答することが求められる。 いつ? 上記応答期間を参照すること。この応答期間に間に合わないときは、出願人は、法第13条 (PCT規則66.2(d)) に規定するとおり、その期間の経過前に国際予備審査機関に期間延長を請求することができる。ただし、期間延長が認められるのは合理的な理由があり、かつスケジュールに余裕がある場合に限られることに注意されたい。 どのように? 法第13条 (PCT規則66.3) の規定に従い、答弁書及び必要な場合には、補正書を提出する。補正書の様式及び言語については、法施行規則第62条 (PCT規則66.8及び66.9) を参照すること。 なお 補正書を提出する追加の機会については、法施行規則第61条の2 (PCT規則66.4) を参照すること。補正書及び/又は答弁書の審査官による考慮については、PCT規則66.4の2を参照すること。審査官との非公式の連絡については、PCT規則66.6を参照すること。 応答がないときは、国際予備審査報告は、この見解書に基づき作成される。
4.	国際予備審査報告作成の最終期限は、PCT規則69.2の規定により 05.12.05 である。

名称及びあて先 日本国特許庁 (IPEA/J P) 郵便番号100-8915 東京都千代田区霞が関三丁目4番3号	特許庁審査官 (権限のある職員) 佐藤 正浩 電話番号 03-3581-1101 内線 3395	3 T 3 4 2 7
---	--	-------------

様式PCT/IPEA/408 (表紙) (1998年7月)

添付用紙の注意書きを参照

I. 見解の基礎

1. この見解書は下記の出願書類に基づいて作成された。(法第6条(PCT14条)の規定に基づく命令に応答するために提出された差替え用紙は、この見解書において「出願時」とする。)

☒ 出願時の国際出願書類

- ☐ 明細書 第 _____ ページ、出願時に提出されたもの
☐ 明細書 第 _____ ページ、国際予備審査の請求書と共に提出されたもの
☐ 明細書 第 _____ ページ、 _____ 付の書簡と共に提出されたもの
- ☐ 請求の範囲 第 _____ 項、出願時に提出されたもの
☐ 請求の範囲 第 _____ 項、PCT19条の規定に基づき補正されたもの
☐ 請求の範囲 第 _____ 項、国際予備審査の請求書と共に提出されたもの
☐ 請求の範囲 第 _____ 項、 _____ 付の書簡と共に提出されたもの
- ☐ 図面 第 _____ ページ/図、出願時に提出されたもの
☐ 図面 第 _____ ページ/図、国際予備審査の請求書と共に提出されたもの
☐ 図面 第 _____ ページ/図、 _____ 付の書簡と共に提出されたもの
- ☐ 明細書の配列表の部分 第 _____ ページ、出願時に提出されたもの
☐ 明細書の配列表の部分 第 _____ ページ、国際予備審査の請求書と共に提出されたもの
☐ 明細書の配列表の部分 第 _____ ページ、 _____ 付の書簡と共に提出されたもの

2. 上記の出願書類の言語は、下記に示す場合を除くほか、この国際出願の言語である。

上記の書類は、下記の言語である _____ 語である。

- ☐ 国際調査のために提出されたPCT規則23.1(b)にいう翻訳文の言語
☐ PCT規則48.3(b)にいう国際公開の言語
☐ 国際予備審査のために提出されたPCT規則55.2または55.3にいう翻訳文の言語

3. この国際出願は、ヌクレオチド又はアミノ酸配列を含んでおり、次の配列表に基づき見解書を作成した。

- ☐ この国際出願に含まれる書面による配列表
☐ この国際出願と共に提出された磁気ディスクによる配列表
☐ 出願後に、この国際予備審査(または調査)機関に提出された書面による配列表
☐ 出願後に、この国際予備審査(または調査)機関に提出された磁気ディスクによる配列表
☐ 出願後に提出した書面による配列表が出願時における国際出願の開示の範囲を超える事項を含まない旨の陳述書の提出があった
☐ 書面による配列表に記載した配列と磁気ディスクによる配列表に記録した配列が同一である旨の陳述書の提出があった。

4. 補正により、下記の書類が削除された。

- ☐ 明細書 第 _____ ページ
☐ 請求の範囲 第 _____ 項
☐ 図面 図面の第 _____ ページ/図

5. ☐ この見解書は、補充欄に示したように、補正が出願時における開示の範囲を越えてされたものと認められるので、その補正がされなかったものとして作成した。(PCT規則70.2(c))

V. 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての法第13条（PCT規則66.2(a)(ii)に定める見解、それを裏付ける文献及び説明

1. 見解

新規性 (N)	請求の範囲 1-13	有
	請求の範囲	無
進歩性 (IS)	請求の範囲 3, 6, 8, 10-11	有
	請求の範囲 1-2, 4-5, 7, 9, 12-13	無
産業上の利用可能性 (IA)	請求の範囲 1-13	有
	請求の範囲	無

2. 文献及び説明

文献1 : JP2003-89795A (住友重機械工業株式会社) 2003. 03. 28、全文全図 (ファミリーなし)

文献2 : JP2003-120419A (東京瓦斯株式会社) 2003. 4. 23、全文全図 (ファミリーなし)

文献3 : JP10-47626A (中国電力株式会社) 1998. 02. 20、段落【0018】、図1 (ファミリーなし)

請求の範囲1に係る発明は、文献1と国際調査報告で引用された文献2とにより進歩性を有しない。文献1に記載された、ガスを可燃成分含有率に応じて分離するためのガス分離装置の、分離されたガスの発熱量調整手段として、文献2に記載された発熱量調整装置およびシステム制御装置を採用することは、当業者にとって容易である。

請求の範囲2に係る発明は、文献1と文献2により進歩性を有しない。請求の範囲1の理由に加えて、文献2にはガス量バランス監視装置が記載されている。

請求の範囲4、5に係る発明は、文献1と文献2により進歩性を有しない。請求の範囲1の理由に加えて、文献1にはガスタービンに接続される排熱回収ボイラを設けることが記載されているし、また、ガスタービンに接続される排熱回収ボイラ、蒸気タービンを設けることは、文献を挙げるまでもなく慣用技術である。

請求の範囲7に係る発明は、文献1と文献2により進歩性を有しない。請求の範囲1の理由に加えて、文献2には混合ガス供給装置と、複数のガス供給通路を任意に開度調整する開閉手段が記載されている。

請求の範囲9に係る発明は、文献1、2と文献3とにより進歩性を有しない。請求の範囲7の理由に加えて、文献3に記載されているように、混合ガス供給経路に配設したフィードバック用可燃成分計測装置の計測結果に基づいて開閉手段を制御することは、周知技術である。

補充欄 (いずれかの欄の大きさが足りない場合に使用すること)

第 V 欄続き

請求の範囲 1 2 に係る発明は、文献 1 および文献 2 により進歩性を有しない。ガスエンジンと比較して起動停止を避けるよう運転すべきガスタービンの運転態様として、ガスタービンの運転を維持し、適宜ガス供給量に応じてガスタービン負荷を変化させることは、当業者が容易になし得ることである。

請求の範囲 1 3 に係る発明は、文献 1 および文献 2 により進歩性を有しない。ガス量バランス監視装置からのガス供給量の変動を示す信号に応じてガスタービン負荷を変更することは、慣用技術である。